

出前図書情報館&講演会 in おおよど

近代の吉野

講演資料集



吉野発電所と水路から吉野川に流れこむ筏

2019年12月8日(日)

大淀町文化会館

よしの きんだいかいさん
吉野の近代化遺産

—わたしたちが受け継いだもの—

はじめに

- 1、近代化する吉野の風景
- 2、吉野にのこる近代化遺産
- 3、近代化がもたらしたもの

おわりに

松田 度

まつだ わたる



プロフィール：

1974年大阪市（現此花区伝法）生まれ。

同志社大学大学院修了後、同大学歴史資料館研究員を経て2005年より大淀町教育委員会に勤務、現在同文化振興課・主任技師。奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所（なら学研究センター）協力研究員。二児の父で、趣味は家庭菜園とウォーキング。

はじめに

今回、奈良県立図書情報館の主催イベント「出前図書情報館」を大淀町で開催するにあたり、テーマにそった講演会を催そうといういろいろ考えたところ、「近代の吉野」という話題におちついた。

今年2019年は、吉野郡内の下北山村・上北山村・野迫川村・天川村・川上村が、来年2020年には、十津川村が村制130周年を迎え、2021年2月には大淀町も町制100周年を迎える。これを機に、吉野が歩んだ近代を見直してみたい。

1、近代化する吉野の風景

吉野が現在の奈良県南部、吉野郡の範囲を指すようになったのは、いつごろなのか。吉野郡ができたのは、律令制の始まりの頃（8世紀の初め）に求めてよいのだが、当時の吉野は、おおむね吉野郡の北部、

吉野川の流域を示すに過ぎなかった。

これに対して吉野郡南部の上北山・下北山村は、江戸時代に「北山郷」と呼ばれ、熊野・紀州藩に属していた。つまり、熊野川の河口からみた「北山」ということである。十津川村（十津川郷）も熊野川を舞台とする世界で、吉野郡でありながら、林業のありかたも「吉野」とは異なっていた。いわば、奥熊野の領域に属していた。

現在の吉野郡全域が奈良県に属すると認識されたのは、それまで未開であった奥吉野の山中に大規模開発が押し寄せ、それを管理する広域行政的な仕事が必要となり、明治30年（1912）に「吉野郡役所」が設けられた近代になってから、と考えると、大過なさそうである。

近代という発想は、今につながる吉野のイメージが定着した頃の記憶を呼び覚ます重要なキーワードとあってよい。

ところで、近代という歴史をふりかえるとき、ぼくたちの身のまわりには、どのくらい手がかりがのこされているだろう。家の古い写真アルバムも、せいぜいのところ戦後のカラー写真くらいしかない。

でも地域単位でみたとき、公共の場に、旧家の庭に、いつも散歩する河沿いの道に、近代の記憶（遺産）が眠っている。近代化、モダンタイムスという華やかなイメージのなかに、吉野という土着の地域の歴史が埋もれているように思う。

十津川村出身の詩人・野長瀬正夫（1906-1984）は、昭和初年頃の下市口駅は、心優しい人々が集い、やわらかな木の香りがする停車場だったと、一片の詩に詠んでいる（「小さな町」『あの日の空は青かった』所収・1970年）。

これに対し、昭和16年（1941）の真夏の夜。詩人・安西冬衛（1898-1965）が、「下市口にて」という散文詩を詠んでいる（詩集『大学の留守』所収・1943年）。その詩碑が、大淀町中央公民館のロビーにたたずんでいる。そこに登場する戦前の下市口駅は、未明のほの暗いホームに、吉野杉の香りがただよう静かな空間である。当時はまだ黒光りの機関車が走って



安西冬衛の詩碑（西浦雪華氏揮毫）

いた。冬衛は、その駅前の風景を「悲哀」とともに凝視していた。

この二編の歌は、『大淀町史』（1973年）で近代文学編を執筆した歌人・前登志夫（1926-2008）が、その冒頭部分にあげたものである。得体の知れない「コロヒサル（怪物）」がひたひたと近づいてきた、まさに吉野の近代化を象徴するイメージといえる。

素朴な山国・吉野が迎えた近代を、林業と鉄道、という切り口から考えてみよう。

吉野林業は、もともと幕府から何の援助もうけない民営林業だった。著名な林業家として、川上村大滝の土倉（どくら）家がある。明治期に活躍した「樹喜王」土倉庄三郎（1840-1917）の功績は「土倉翁造林頌徳記念碑」（1921年）として、ふるさと大滝集落の鎧掛け岩に刻まれている。彼は、吉野山の桜の保全、自由民権運動、同志社大学や日本女子大学の創立を支援し、奥吉野の発展と地域の活性化に生涯を捧げた人物でもある。

また、上市村（現吉野町上市）の北村家（又左衛門）も「キマタ」としてよく知られた資産家である。大淀町西増・前田家には、慶應元年（1865）の五條支配所への献金リストが残されている。ここには、支配領域内の資本家ベスト4として、①上市・北村又左衛門/②五條・栗山藤助/③大滝・土倉庄左衛門（庄三郎の父）/④下市・永田藤兵衛（平）の名が出てくる。そのリストに名を連ねる資産家の多くは、林業を主に営む「山林王」であった。

上市・下市は、江戸時代から続く吉野郡の経済の中心地。それぞれに吉野

川を流通基盤とした町並みが形成されていた。吉野の経済の要であった林産業は近代にも引き継がれ、山中は木馬（きんま）道を下る木馬曳きであふれ、川沿いでは筏流しが盛んであった。

このような世情をうけて、明治35年（1902）、日本一の農林学校を目指して吉野の地に奈良県立農林学校が開校した。県立農林学校は、吉野林業をひかえた山麓の農業地帯で、農林両科を併設する最適地を求めた結果、大淀村下淵（今の大淀高校の敷地）に選定された。

この吉野のさらなる近代化を進めるため、鉄道の敷設が計画されたのは必然の成り行きだった。最初に鉄道敷設の計画がもちあがったのは、明治32年（1899）の事。土倉庄三郎が中心となって立ち上げた「吉野鉄道」に対し、免許状が出された（下市町永田家文書・展示資料）。実際のルート案は現在の大淀町下淵をとおり「吉野川北岸線」に決まったが、この時まで、吉野川南岸、現在の下市町新住・阿知賀間を通る計画図も作成されていた。結局、これらの計画は頓挫した。

明治41年（1908）には、大淀村新野の資産家・森栄蔵（1873-1945）が、馬車鉄道の敷設を計画。これも頓挫しかけたが、当時の吉野郡長・谷原岸松の尽力により、森栄蔵がその工事を請負うかたちで、明治44年（1911）、龍門の資産家・阪本仙次（1869-1934）を社長として、念願の吉野軽便鉄道が実現した。開業は大正元年（1912）。現在の近鉄吉野線の前身である。

その一方、奥吉野の山々では、江戸時代から山野の開拓・植林と鉱山開発が進め

られていたが、索道（ケーブル架線）の建設によって、それまで静かだった山中に運搬機械の轟音がひびくようになった。

2、吉野にのこる近代化遺産

近代化遺産とは、日本列島が近代化していくプロセスを物語る、交通・土木・産業などに関する歴史・文化遺産を指す。文化庁でも1990年から近代化遺産の調査が始まり、1993年には、近代の土木・産業施設が初めて国指定の重要文化財になった。

奈良県でも近年、近代化遺産の総合調査がおこなわれ、奈良市の旧奈良監獄（奈良少年刑務所）が2017年2月に国指定の重要文化財となった。また、その利活用をはかるため、2019年11月には「監獄史料館」が開館し、話題となっている。

ここでは、奈良県教育委員会が刊行した『奈良県の近代化遺産』（2014年）を参考にしながら、吉野口駅から吉野駅まで、近鉄吉野線の沿線にある主要な近代化遺産と、吉野郡内の特徴的な近代化遺産を紹介しよう。

吉野口駅（御所市古瀬）

鉄道の駅じたいは、明治29年（1896）、南和鉄道の葛駅として竣工し、明治36年（1903）、吉野口駅に改称した。大正元年には吉野軽便鉄道の基点駅ともなった。開業時からの古い木造駅舎の雰囲気が残されている。鉄道によって吉野の山林資源を搬出するため、この近くに「大峯索道」の駅が建造された。

天川村洞川の大峯鉱山は大正7年（1918）から採掘がおこなわれ、あわせ



大淀町の山中にのこる大峯索道の基礎

て鉱山と吉野口駅を結び大峯索道も敷設されていた。この鉱山は短命で、大正9年（1920）にはその役割をほぼ終えている。この索道は大正8年時点で貨物用に転換され、昭和10年（1935）頃まで使われた。この索道跡については近年、大淀町今木・大岩間の山中で、架線塔の四方の基礎（4箇所のうち1箇所は亡失）が確認されている。吉野口駅の東方の山中には、まだその他の基礎も残っているとみられ、今後踏査が必要である。

薬水（大淀町薬水）

薬水は弘法大師の井戸伝承からきた地名である。吉野（軽便）鉄道の遺産としては、大正元年（1912）に竣工した「薬水門」の扁額がかかるレンガ造りの二連アーチトンネル（薬水拱橋）が見所だ。

これは、100年が経過した今でも近鉄吉野線の高架橋として現役の建造物。平成25年（2013）には土木学会の「選奨土木遺産」にも認定されている。

鉄道の高架橋はこのほか、福神駅の周辺や佐名伝地区（大阿太駅の近く・百合尾墓地入口）にもこのこされている。

明治35年（1902）には、札幌農学校

を卒業した奥徳平一家が開いた「薬水園」を起点に、二十世紀梨を中心とした果樹栽培がはじまった。これが現在、大阿太高原にひろがる梨園の端緒となっている。初期の古木も現存している。大正3年（1914）には、その開墾に寄与した小出與平治を讃える彰功碑が、大阿太高原の一角、三本松の地に建立されている（『大阿太高原のあゆみ』2005年）。

下市口（大淀町下淵）

大淀町下淵は、吉野の商都として知られた下市の北の入口にあたる。吉野川を渡れば下市町、さらに国道309号線を南下すれば、黒滝村をへて天川村、さらに下北山村を越えて熊野へと道が続く。

吉野川の橋としては、大淀町下淵と下市町下市を結ぶ千石橋が著名である。天明8年（1788）頃は「大橋」と呼ばれ、文久年間（1861～1864）に「千石橋」の名称が使われだした（安田良兼「千石橋と檜の渡」『下市町史』1958年）。

明治10年頃には大掛かりな木橋が完成した（1代目千石橋）が、その後度々落失したようである。

続いて、下市の資産家で吉野銀行の創始者・永田藤平（1840-1909）らが中心となって東西奔走。近代的鉄橋が誕生したのは、明治25年（1892）のことだった（2代目千石橋）。

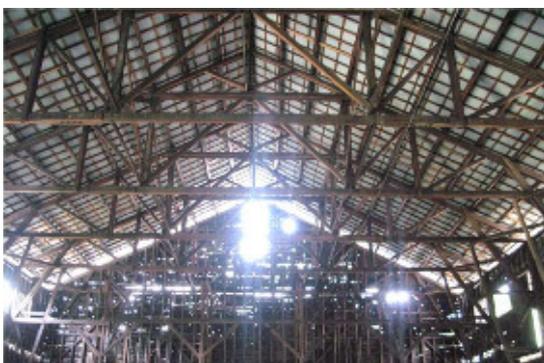
その後、度々の補修を繰り返し、昭和5年（1930）には、その上流に橋が付け替えられた（3代目千石橋）。戦後、伊勢湾台風（1959）で大きな被害を受けた後、鉄橋が昭和38年（1963）に新造され、今にいたっている（4代目千石橋）。

六田（大淀町北六田）

吉野川沿いの六田は現在、川南を吉野町六田、川北を大淀町北六田と称しているが川を軸としたいわゆる「クシ団子」の地域だった。1300年前の万葉の時代には「むつだのよど」とも呼ばれ、平安時代以降は吉野川を渡る渡船場（今の柳の渡し跡）が設けられ、人の往来の盛んなところであった。

柳の渡し跡にかかるのが、美吉野橋である。初架は大正8年（1919）の木橋で、昭和11年（1936）に鉄橋となったあとも、橋脚の本体には大正期の基礎がそのまま転用されている。近年、耐震化と補強工事が行われている。

近鉄六田駅の東側には、大正元年に開通した吉野（軽便）鉄道の終着地だった旧吉野駅があった。その駅のプラットホーム跡と接するように、北村家（北村酒造）の所有する、木造の木材倉庫群（旧北村製材所倉庫）がある。そのうち、最も古い大正2年（1913）上棟の倉庫は老朽化のため、平成30年（2018）に惜しまれつつ姿を消した。六田駅の南側に建つ北村化学研究所の木造倉庫も、北村酒造の多角経営を示す建造物のひとつである。昭



北村化学研究所の倉庫

和25年（1950）の竣工。平面規模36.5×17.8m、高さ13mの巨大な現役倉庫で、そのトラス組みの壮麗さには、当時の技師たちの技術力の高さもうかがえる。

上市（吉野町上市）

上市は、伊勢南街道沿いに発展した下市とならぶ吉野の商都。谷崎潤一郎『吉野葛』（1931年初出作品）では、その町並みが舞台となっている。

吉野川橋梁は、吉野鉄道の進延にともない昭和3年（1928）に開通した鉄道橋。「上市の鉄橋」として親しまれ、吉野川をゆっくりと渡る列車のシルエットが夕日に映える風景は一見の価値あり。

県営吉野貯木場跡（吉野町飯貝・丹治・橋屋）は、昭和12年（1937）に起工、同14年（1939）に竣工。奈良県、とりわけ吉野の林産業を支える屋台骨として利用され、今に受け継がれている。吉野貯木場に近い吉野神宮駅（吉野町丹治）は、その木材輸送の基地としても使われた。

吉野山（吉野町吉野山）

いわずと知れた桜の名所である。江戸時代から日本随一の観光地として栄えた。昭和3年（1928）、大淀町北六田にあった吉野駅から吉野鉄道が延長され、吉野山の膝元に新たな吉野駅が開業した。和洋折衷の駅舎は、下市町出身の建築家・岩崎平太郎の建築として知られている。

吉野山観光の立役者は、吉野山旅客索道（吉野山ロープウェイ）である。昭和4年（1929）に開業した、現役では日本最古の索道。2012年、（一社）日本機械学会の「機械遺産」に認定されている。

近代土木・産業遺産

ここでは鉄道沿線からはなれて、吉野郡内にのこる代表的な近代化遺産について簡単にふれておきたい。

吉野川流域の水力発電にかかる大規模な施設群として、旧宇治川電気（現関西電力）の樫尾・吉野発電所が注目される。大正8年（1919）に計画され、11・12年に竣工した発電所と関連水路は、木材運搬（筏流し）にも活用された。林業と発電産業のハイブリッドな遺産として全国的にも珍しい。なお、吉野町と川上村を結ぶ五社峠では、昭和39年（1969）ごろまで「木馬道」を駆け下ってくる木馬曳きの姿も見られたという。

電源開発にかかるダム の 典型例は、昭和12年（1937）に竣工した九尾（つづらお）ダム（天川村）だろう。熊野川に注ぐ清流・天ノ川に設けられた水力発電用の重力式コンクリートダムである。上流部は土砂の堆積で貯水量が減少し、ダムとしての機能は十分果たせていないが、いまだ現役である。流線型のゲートは吉野を代表する近代ダムと呼ぶにふさわしい。

下北山村の通称「大橋」（池原橋）も戦前の昭和4年（1929）の架橋。163mの長大な橋は、当時の村民のランドマークとして人々の目に映ったことだろう。

特色ある吉野の近代産業史的一幕として、大正3年（1914）には吉野郡茶業組合が、大淀町東部の「増の里」を中心として近代茶業の隆盛に尽力した、中西吉三郎の顕彰碑が建立されている。

吉野山や天川村洞川には、江戸時代から続く和漢薬に関する薬業（製薬・売薬）の資料も残っている。野迫川村の一大産

業だった高野豆腐（氷豆腐）作りについては、高野豆腐伝承館（野迫川村）に製法を伝える民俗資料一式が保管されている。

近代建築の今



黒滝村歴史民俗資料館（旧村役場庁舎）

黒滝村旧役場庁舎（元吉野材木黒滝郷同業組合事務所）は、明治43年（1910）に竣工した洋風建築である。現在は、観光施設「黒滝森物語」のなかに移築され、奈良県指定の文化財建造物、兼「黒滝村民俗資料館」として利活用されている。一階には講演会などのできるオープンスペースがあり、二階には、林業や樽丸製作用具（県指定文化財）等の貴重な民俗資料が展示されている。

下北山村の歴史民俗資料館（上桑原）もユニークな施設である。これは、村を代表する大正時代の偉人で、建築家・教育者の西村伊作（1884-1963）が、大正14年（1925）に建てた旧桑原病院を移築した建物。西村家は北山郷を代表する山林王。伊作はその豊かな財力と豊富な知識を使い、歌人・与謝野鉄幹・晶子夫妻とも交流があった。

そんな下北山村の村民の誉れの文化を創造する場として資料館は開設された。

展示室には、伊作をはじめ郷土を代表する著名人（化学者の中瀬古六郎 1876-1945、書道家の杉岡華邨 1913-2012）の紹介、民具・筏流しや山仕事の生業の道具、教育関係の資料が豊富に展示されている。郷土史家・後呂忠一（1925-2017）の蔵書 2,000 点を公開している「後呂文庫」、そして彼が研究を進めた、吉野・熊野で多くの信仰を集めた幕末の修験者・実利（じっかが）行者（1843-1884）の関係文書もある。

吉野郡内では、各地で木造の校舎が保存・利活用されている。旧天川西小学校（天川村和田）は、総ヒノキ造りで昭和 18 年（1943）の建築。平成 14 年（2002）に閉校し、今は地域活性化の拠点施設「天和の里」として利活用されている。

昭和 17 年（1942）・昭和 31 年（1956）に改築された旧広橋小学校（下市町広橋）も、明治 33 年（1900）に新築された木造校舎を母体になっている。1999 年の閉校後、「よしの広橋スマイルヴィレッジ」の名で、観光交流のコミュニティ施設として利活用されている。

信仰にかかわる壮大な近代神社建築としては、吉野神宮（吉野町吉野山）が挙げられる。明治 25 年（1892）に竣工、昭和初年から順次改築され、本殿を含む 22 件の木造建造物が国の登録有形文化財となっており、現在も参詣者が絶えない。

記録遺産

近代戦争にかかわる大絵馬も、郡内の各所、とくに神社の拝殿に残されている。身近な大淀町内で見ると、薬水八幡神社には、幕末から明治期にかけて 5 点の大



瀬峡の筏師・大正 12 年（1923）撮影

絵馬があり、桧垣本八幡神社にも明治 32 年（1889）の戦勝祈願の絵馬がある。

これらは、当時の民衆心理を記録した芸術作品としても貴重である。

大正時代からは、奈良県内でも映画の撮影・上映がなされていた。県内に現存する最古の映画フィルムは、大正 11 年（1922）8 月に内務省衛生局が大峯奥駈道・大台ヶ原を撮影した『吉野群峯』（大淀町所蔵）と、大正 12 年（1923）の瀬峡での筏流しのようすが撮影された記録映像『瀬八丁実写』である（いずれも大淀町所蔵・岸田日出男関係資料）。

昭和 10 年代ごろまでの戦前の映画・映像記録は、県内・郡内各所に残されているが、そのなかには『昭和 3 年の記録—上北山村—』（村教育委員会所蔵）といった自治体がかかわったものだけでなく、個人的に撮影された映像記録もある。これらの映像遺産からは、写真や文書だけではわからない、多面的な近代化のようすをかいまみることができる。

3、近代化がもたらしたもの

ここで、20 世紀初頭の自然保護運動について記しておこう。ヨーロッパの自然

保護運動に触発され、日本でも明治44年（1911）に「史蹟名勝天然紀念物保存協会」が発足（当初は紀念物の表記）。その会誌『史蹟名勝天然紀念物』は、大正3年（1914）9月の創刊後、昭和19年（1944）8月にいたるまでのほぼ30年にわたり刊行された。大正8年（1919）には、念願の「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定された（4月10日公布・6月10日施行）。自然・文化遺産の保護を明文化した日本で最初の法律であり、今年（2019年）がその施行から100年目にあたる。この保存法は、有識者たち（東京帝国大学の教授陣）が中心となって法文が起草され、内務省の所管としてスタートした（昭和3年からは文部省に移管）。戦後の昭和25年（1950）からは「文化財保護法」に再編され、以後数回の改定をへて、現行法に受け継がれている。今その事務を担っているのは、文部科学省（文化庁）と地方公共団体（自治体）の文化財保護部局である。

奈良県では2019年4月まで教育委員会事務局（文化財保存課）が、同年4月からは地域振興部（文化財保存課）、つまり知事部局がその精神を継承している。

吉野の自然と近代化

保存法がはじめて制定された大正時代には、国土開発にともない「記念物」の破壊が進み、その保存運動が高まっていた。ことに奈良県、とりわけ大台ヶ原では、大正5年（1916）から始まる四日市製紙株式会社による、東大台のトウヒ林の乱伐が問題視されていた（川端一弘「大台林業株式会社」『自然史』No.1 2019年）。

これをうけて同年4月10日、吉野山保勝会主催の「史蹟名勝天然紀念物保存に関する保勝講演会」が吉野山東南院で開催された。侯爵で「史蹟名勝天然紀念物保存協会会長」の徳川頼倫（よりみち・1872-1925）をはじめ、「桜博士」の植物学者・三好学（1862-1939）、建築学者の関野貞（1868-1935）といった東京帝国大学の著名な研究者とともに、講師として登壇したのが同大理学博士・白井光太郎（1863-1932）だった。彼の講演のタイトルは「吉野名山の保護について」。その熱意ある講演の行間には、日本列島全体を揺り動かしていた近代化の波、自然破壊への警鐘が含まれていた。

この講演を機に、吉野群山の自然遺産の価値を再認識し、吉野郡当局の担当として諸々の活動をはじめることになったのが、後に「吉野・熊野国立公園の父」と呼ばれた岸田日出男（18-1959）である。「国立公園」と「吉野群山」が結びつくことになったきっかけは、まさに白井の思いをうけとめた、24歳の岸田青年の共感にあったといえる。

それから5年後の大正10年（1921）、白井は9月1日から11日にかけて奥吉



山上ヶ岳に建つ岸田日出男顕彰碑

野を踏査している。これは内務省の「史蹟名勝天然記念物調査会」の委員として、指定候補物件の調査に伴うものであった。これに岸田と岡本勇治（1895-1933）が同行している。岡本は京都大学で植物学を学んだ研究者。当時、岸田と共に「奈良県史蹟勝地天然記念物調査会」の地方委員を務めていた。

この時の実地調査の成果で「仏経嶽原始林」と「シシンラン群落」（いずれも上北山村）、「オオヤマレンゲ自生地」（天川村ほか）は国の天然記念物として順次指定された。仏経嶽原始林は、調査後すぐに指定されており（大正 11 年 10 月）、東大寺知足院の「ナラノヤエザクラ」と、春日大社境内の「ナギ樹林」（ともに大正 12 年 3 月指定）、「春日山原始林」（大正 13 年 12 月指定）がそれに続く。岸田・岡本は地元の委員として、これらの最初期の天然記念物指定に奔走した。

とりわけ岸田は、先述の大台ヶ原の保存問題と仏経嶽（八経ヶ岳）周辺の森林開発が念頭にあり、白井の指導のもと、貴少植物の保護措置をとりながら、「国立公園」に指定しないかぎり保護は困難…という考えを深めていた。奈良県は、山岳の豊かな自然を保有する一方、産業発展のため大規模な森林開発にも力を入れていた。近代の吉野はまさに、そのせめぎ合いの舞台であった。

ニホンオオカミのいたところ

ところで岸田は、『日本狼物語』という本を書き、ニホンオオカミの頭骨も所持していた。ニホンオオカミは、岸田が 14 歳の明治 38 年（1905）、吉野郡小川村

（現東吉野村）の鷲家口で捕らえられたのを最後に絶滅したとされている（現在その剥製と骨格標本は、大英自然史博物館が保管している）。

彼はニホンオオカミについて、どのような思いを抱いていたのか。

『日本狼物語』の原稿はおおむね昭和 11 年（1936）頃にできあがっていた。昭和 34 年（1959）の岸田の没後、その原稿を子息の岸田文男と吉野風土記の編集者・花岡大学が相談して世に出したのが、昭和 39 年（1964）のことだった。

その始まりは大正 4 年（1912）8 月、大台ヶ原にある大台教会の主・古川嵩（1860-1930）に聞いた狼談話だが、その時岸田はあまり関心がなかった。

ところが昭和 9 年（1934）、ニホンオオカミを研究していた民俗学者・柳田国男（1875-1962）との出会いによって、彼の「狼熱」が急速に高まった。そして昭和 10 年から同 11 年にかけて、吉野・熊野の友人・知人等にオオカミに関する情報収集をおこなっている。話を聞き、手紙でやり取りしたことを中心に、74 件の狼談話が『物語』に掲載されている。



岸田日出男が所持していた上北山村のニホンオオカミの頭骨

この本は、ガリ版刷りの文芸誌『吉野風土記』の特集号として刊行されたため、発行部数が少なく、すぐに絶版となった。

それを嘆いた埼玉県にある秩父宮記念三峰山博物館の研究者・八木博が、2014年に青い表紙の『日本狼物語（復刻版）』を刊行している。

岸田は、戦前に多くの人々の証言を聞き取りながら、ニホンオオカミがいなくなった理由を探した。『日本狼物語』では、絶滅したとは書かず、伝染病のために激減したのではないかと記している。実際はどうなのか、その事実関係を確かめたい、というのが岸田の本音だった。

岸田は、この紀伊半島のどこかにならまだニホンオオカミが生きていると信じていたのかもしれない。人間とのかかわりでニホンオオカミをどう評価するかはさておき、絶滅に瀕している動物の声をのこそうと考えた岸田の『物語』は、ニホンオオカミの「生きた証」なのである。

その意味で岸田は、近代吉野の「自然保護活動の父」といってもよいだろう。

おわりに

吉野の近代化というテーマは、語りつくせないほどの情報がある。しかしその本質は、縄文時代以来長く続いた「自然」と「人」との共生が、近代化という社会に飲み込まれていった時代の記憶（アーカイブ）だと、ぼくは受け止めている。

吉野林業が最盛期を迎え、電源開発のためのダムができ、黒光りの機関車が目の前を通り過ぎるようになった。

そのとき吉野の人々は、西洋由来の産業革命に心踊る一方、冒頭に述べたよう

な「悲哀」のアンチ・テーゼと、川面に筏師の声がひびき渡る、かつての牧歌的な農山村の幸福を思い起こしていたのではないかと、と思う。

吉野の近代化遺産とは、産業や交通、モダンな洋風建築に限らない。そこには災害・戦争を乗り越え、自然と人のあらゆる関係を包括した近代化の記憶が含まれていると、いい。ぼくたちは、そのような近代化を乗り越えて今、吉野の地に根差した「よしの遺産」を受け継いでいるのである。

【参考文献】

- 土倉祥子『評伝土倉庄三郎』朝日テレビニュース社出版局 1966年。
大和タイムス編『大和百年の歩み 政経編』1970年。
同『大和百年の歩み文化編』1971年。
大淀町史編さん委員会編『大淀町史』1973年。
鈴木良編『奈良県の百年』県民百年史29 山川出版社 1985年。
伊藤孝『日本の近代化遺産—新しい文化財と地域の活性化—』岩波新書 695 2000年。
大淀町果樹組合編『大阿太高原のあゆみ』2005年。
谷彌兵衛『近世吉野林業史』思文閣出版 2008年。
奈良県教育委員会『奈良県の近代化遺産—奈良県近代化遺産総合調査報告書—』2014年。
ちょブック製作委員会編『ちょぼくブック』2014年。

こしゃしん よしの げんふうけい 古写真でたどる吉野の原風景

はじめに

- 1、吉野を写した絵葉書
- 2、絵葉書・古写真に写る近代化

おわりに

成瀬 匡章
なるせ まさあき



プロフィール：

1974年三重県生まれ。

皇學館大学大学院国史学専攻修了。

公益財団法人吉野川紀の川源流物語(川上村・森と水の源流館)勤務。奈良県中世城郭調査研究委員会調査部会調査員。奈良県内や吉野を中心とした絵葉書・古写真の収集と研究を続けている。

はじめに

神社やお寺の売店、観光地の土産物屋をのぞくと、必ずと言ってよいほど絵葉書が売られているのを目にする。定番の土産物と言える絵葉書が日本で初めて登場したのは、明治33年(1900年)に私製葉書の発行が認められてからのことになる。

当初、宛名が書かれる表面には通信文を書くことが出来なかったが、明治40年(1907年)から、下方の1/3、大正7年(1918年)からは、1/2に通信文を書くことができるようになり、現在の絵葉書と同じ形となった。

絵葉書が登場してからしばらく経って、日露戦争(1904~1905年)が起ると、戦場を写した絵葉書が反響を呼び、この頃から絵葉書が定番の観光土産になっていった。

当時はカメラが一般家庭に普及していなかったこともあり、原版を作れば大量に印刷できる絵葉書は、観光土産だけでなく、祝祭や、建物・橋の竣工、学校行事の記念品としても多く作られることになる。特に明治30年代後半から用いられ始めたコロタイプ印刷の絵葉書は、画質の高さから人気を集めた。この頃に発行された絵葉書の多くがコロタイプ印刷によるものであるが、大正時代後期になって、より安価で多色刷りが可能な印刷技術が普及すると、コロタイプ印刷は下火となっていった。すっかりすたれてしまったコロタイプ印刷ではあるが、印画紙にプリントしたものに近い高い解像度を持ち、耐久性が高いため、100年近く前に作られた絵葉書でも、当時の風景や人物の様子を詳しく知ることができる貴重な資料となっている。

1、吉野を写した絵葉書

吉野、特に吉野山は桜の名所として、また、修験道の聖地として昔から多くの人たちが訪れている。『吉野山独案内』（1671年刊）や、『大和名所図会』（1791年刊）などの絵入りの名所案内も多数出版され、それらは当時の吉野を知る上で重要な絵画資料となっている。

明治時代になり、神仏分離令によって吉野山の寺院は大きな打撃を受けたものの、観光地としては健在で同時期の観光マップも何種類か発行されている。

明治22（1889年）に後醍醐天皇を祀る吉野宮（現 吉野神宮）が創祀されると、吉野の南朝史跡としての面が強調され、修学旅行のコースに入るようになる。この頃はまだ吉野の風景を写した絵葉書は発行されていないものの、当時、ヨーロッパでは名刺サイズの写真カードが流行しており、それが日本にも伝わり、同様の『吉野山名勝寫眞』が作られている。正確な撮影時期・発行時期は不明であるが、被写体や書き込みなどから明治25（1892）年9月～35（1902）年11月にかけて撮影・発行されたものとみられ、吉野山の風景を写したものとしては古い部類に入る写真となる（図1）。



図1 「吉野山吉野宮」『吉野山名勝寫眞』

明治33（1900）年に絵葉書の発行が始まると、吉野でも夥しい数の絵葉書が発行されるようになる。吉野山の名所だけでなく、大峯山の修験や、吉野川の筏流しなどの吉野林業の姿、明治32（1899）年に開山されたばかりの大台ヶ原も絵葉書の題材として取り上げられている。

これらの絵葉書は、名所を写したものではありませんが画一的なものとは限らない。アングルを変え、撮影時期をずらした絵葉書が作られている。撮影が困難であったであろう大峯山や大台ヶ原を写したものでも同様である（図2）。



図2 「大峰山鐘掛行場附近ノ美雪」
大正7（1918）年～昭和8（1933）年頃

まして吉野山の場合、全種類の把握はおそらく出来ないであろう程、多種多様な絵葉書が発行されていたことは、残されている多くの絵葉書が物語っている。

このように時期やアングルを変えた絵葉書が発行されていることは、当時の観光客にとって土産物の選択肢が増え、販売側にとっても売り上げを伸ばせる喜ばしいことであったと思われるが、それ以上に当時の風景・風俗の変遷を追う上で大変役に立つ資料となる。

例えば、図3は太閤花見塚付近から



図3「吉水院の森」と「吉野山に於ける仁王門並ニ蔵王堂勇姿の遠望」の合成

吉野山を撮影した絵葉書である。撮影年は不明であるが、昭和8(1933)年以降に発行されたものである。当時の吉野山では境内地と尾根筋にわずかに樹木が残されているのみで、それ以外の場所は殆ど耕地化されていることが分かる。

料として樽丸・樽(クレ)の生産が盛んになった江戸時代からである。無節で年輪の幅が詰まった「吉野杉」は、樽丸に適した杉を育成する中で生まれた。この吉野林業の林業家として有名なのが土倉庄三郎(1840~1917)である。

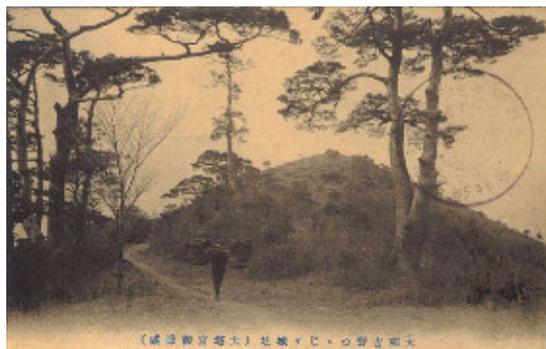


図4「大和吉野つつじヶ城址(大塔宮御據城)」
明治40(1907)年~大正7(1918)年頃



図5「千年杉と土倉庄三郎翁(右より二人目)」
大正10(1921)年~昭和8(1933)年頃

図4でみられるように、吉野山の最奥部である高城山にも殆ど樹木がない。写っている人物が担ぐのは薪か炭であろう。これらの絵葉書に写された吉野山の姿からは、吉野山が聖地・名所・史跡だけでなく生活の場であったことをうかがわせる。

吉野の主要な産業であった吉野林業も多くの絵葉書に取り上げられている。

「吉野杉」で知られる吉野林業は室町時代から植林が始まったとされているが、本格的になるのは、樽や酒造用の桶の材

土倉庄三郎は、林業技術の普及や流通の改善、内国勸業博覧会への出品などにより吉野杉の販路を拡大させ、得られた利益の多くを教育者・政治家への援助、社会事業に充て、同志社大学・日本女子大学への資金援助や自由民権運動への協力、林業技術の普及を行っている。図5は吉野林業の視察に訪れた人を庄三郎自らが案内している様子を捉えたものである。発行されたのは庄三郎の没後のことであるが、プロマイド的なものとして需要が

あったことがうかがえる。

庄三郎が刊行に関わった『吉野林業全書』（1898年刊行）以降、吉野林業を紹介する各種の概説書が発行されているが、それらの中には土倉家に近く、林業の見学に便利なのが売りになっている旅館の広告なども入っており、上記の絵葉書と共に、庄三郎そのものがある意味の観光名所であったと言えるのかもしれない。

庄三郎が力を入れていたものに、流通の改善がある。現在の川上村内を走る国道169号線は庄三郎が中心となって整備した東熊野街道が元になっている。吉野町と川上村の間にある五社トンネルの上には当時整備された牛車が通れる幅をもった道が今も残っている。

吉野林業を取り上げた絵葉書の被写体として多く見られるのが筏流しの様子である。筏を流すための堰の設置や障害となる岩石の除去などは以前より行われていたが、明治以降になると本格的な改修が行われるようになり、その痕跡は吉野町宮滝付近や川上村大滝で見ることができる。川上村大滝には2本の滝が平行して流れており、その一つが「割滝」と呼ばれる水路である(図6)。「割滝」掘削は江戸時代には始まっていたが、当時は岩場の上げた木材を滑らせる溝に過ぎなかった。明治時代になり、庄三郎が中心となって筏が流下できるように改修されている。

「割滝」は庄三郎の没後も手が入れられているようで、川上村で土倉庄三郎の顕彰活動を行っているNPO法人芳水塾が行った現地調査(図7)では、庄三郎の時代には用いられていなかった削岩機の痕跡も見つかっている。

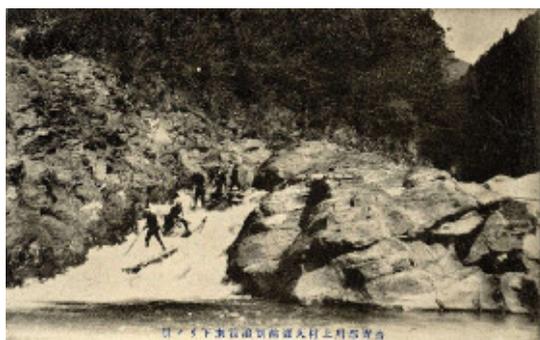


図6 「吉野郡川上村大滝前割滝筏乗下リノ景」

明治40(1907)年~大正7(1918)年頃



図7 「割滝」調査(2017年7月12日)

2、絵葉書・古写真に写る近代化

土倉庄三郎は鉄道の建設も試みたが、この計画を果たすことが出来なかった。紆余曲折を経て大正元(1912)年、吉野口駅から現在の六田駅である吉野駅まで吉野軽便鉄道が開通する。翌年、吉野鉄道に名称変更し、昭和3(1928)年、現在の吉野駅まで延長、同時に電化している。その翌年には、大阪電気軌道に合併され、昭和16(1941)年に関西急行鉄道、昭和19(1944)年からは近畿日本鉄道吉野線となる。

図8は、大正10(1921)年10月8日~13日に開催された、大日本山林会第三十一回大会の写真集『大日本山林大會大和之印象』(1921年・藤田三思堂)



図8 『大日本山林大會大和之印象』

に納められている当時の吉野駅である。大会のエクスカージョンとして行われた吉野林業視察旅行の様子を写したもので、当時のプラットフォームは、近鉄六田駅の一部に残されている。一行は駅から美吉野橋を渡って吉野山へ向かい、奥駈道を通り川上村高原を經由して同村西河で閉会式を行っている。

一行が渡った美吉野橋は、吉野川を渡る柳の渡しに大正8（1919）年に架けられたものである（図9）。架橋前、冬季のみ仮設の橋が架けられ、春から秋は渡し船が利用されていた。



図9 「吉野山名所 吉野川清流ト三吉野橋」

現在の美吉野橋は昭和11（1936）年に架け直されたものであるが、橋脚は大正時代のものが使われている。

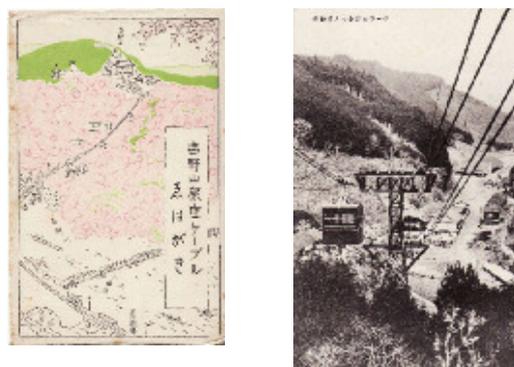


図10 「吉野山架空ケーブル糸はがき」

昭和3（1928）年、吉野鉄道は現在の吉野駅まで延長し、その翌年に営業が始まったのが、吉野山ロープウェイである（図10）。現存する日本最古のロープウェイであり、鉄塔などが現役で使われ続けていることなどが評価され、平成24（2012）年に日本機械学会により機械遺産にも登録されている。

鉄道や道路・橋などの整備が進むと、より多くの人たちが吉野に向かうようになった。吉野山への観桜客だけでなく、吉野山地の山々が「大和アルプス」と称され、多くの登山者が訪れている。特に明治32



図11 「郡山高等女学校第一回大台ヶ原登山」

（1899）年、古川嵩（かさむ）により開山された大台ヶ原は、女人禁制の制約がないため、女学生による登山も行われた。図



図 12 「国立公園吉野及熊野水彩寫生繪葉書」

11は大正11(1922)年、郡山高等女学校の大台ヶ原登山記念繪葉書である。

この頃より吉野山地の自然保護が叫ばれ、やがて昭和11(1936)年の吉野熊野国立公園指定へと向かっていく。

図12は、吉野熊野国立公園に関わる繪葉書である。当時の画壇を代表する画家、鹿子木孟郎(1874~1941)が、昭和7(1932)年、大阪電気軌道から依頼を受けて、国立公園候補地のスケッチ旅行を行い、翌年、大阪三越で展示した水彩画の繪葉書である。

押されたスタンプから昭和8(1932)年には発行されたことがわかる。指定前ではあるが袋には「国立公園」と明記されており、指定に向けた運動を盛り上げるために敢えて「国立公園」の文字を入れた可能性がある。

また大阪電気軌道が昭和6(1931)年に「大正広重」と呼ばれた吉田初三郎(1884~1955)の「大峯山大台ヶ原吉野群山大図絵」(展示資料)を発行しているが、これも吉野熊野国立公園の指定に関わる資料の一つといえるのかもしれない。

おわりに

戦前に発行された繪葉書・古写真から近代の吉野の姿を探ってきた。古い繪葉書は、名所を写した観光地のありふれたものであっても、そこに写り込んだ風景や人物から、当時の風俗や自然環境を知る歴史資料としての価値が高い。

幸いにして古い繪葉書の収集家は多く、大学・図書館・博物館が収蔵するものも多い。その資料的価値を高めていくためにも、奈良県立図書情報館ITサポートーズが進めている「奈良の今昔写真」のような、デジタルアーカイブとして広く公開する動きが広がっていくことが望まれる。

【参考文献】

奈良県教育委員会『奈良県の近代化遺産—奈良県近代化遺産総合調査報告書—』2014年。

和歌山大学紀州経済史文化史研究所編「繪葉書 そのメディア性と記録性」2013年。

田中淳夫『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』2012年 洋泉社。

堺市博物館『パノラマ地図セレクション—吉田初三郎の世界—』2010年。

細馬宏通『絵はがきのなかの彦根』2007年 サンライズ出版。

佐々木泰造「世界遺産としての吉野—近現代の吉野の歴史・文学・自然・観光—」『吉野 仙境の歴史』2004年 文英堂。

鈴木 林『大台ヶ原開山記—古川嵩伝記—』2001年 近代文芸社。

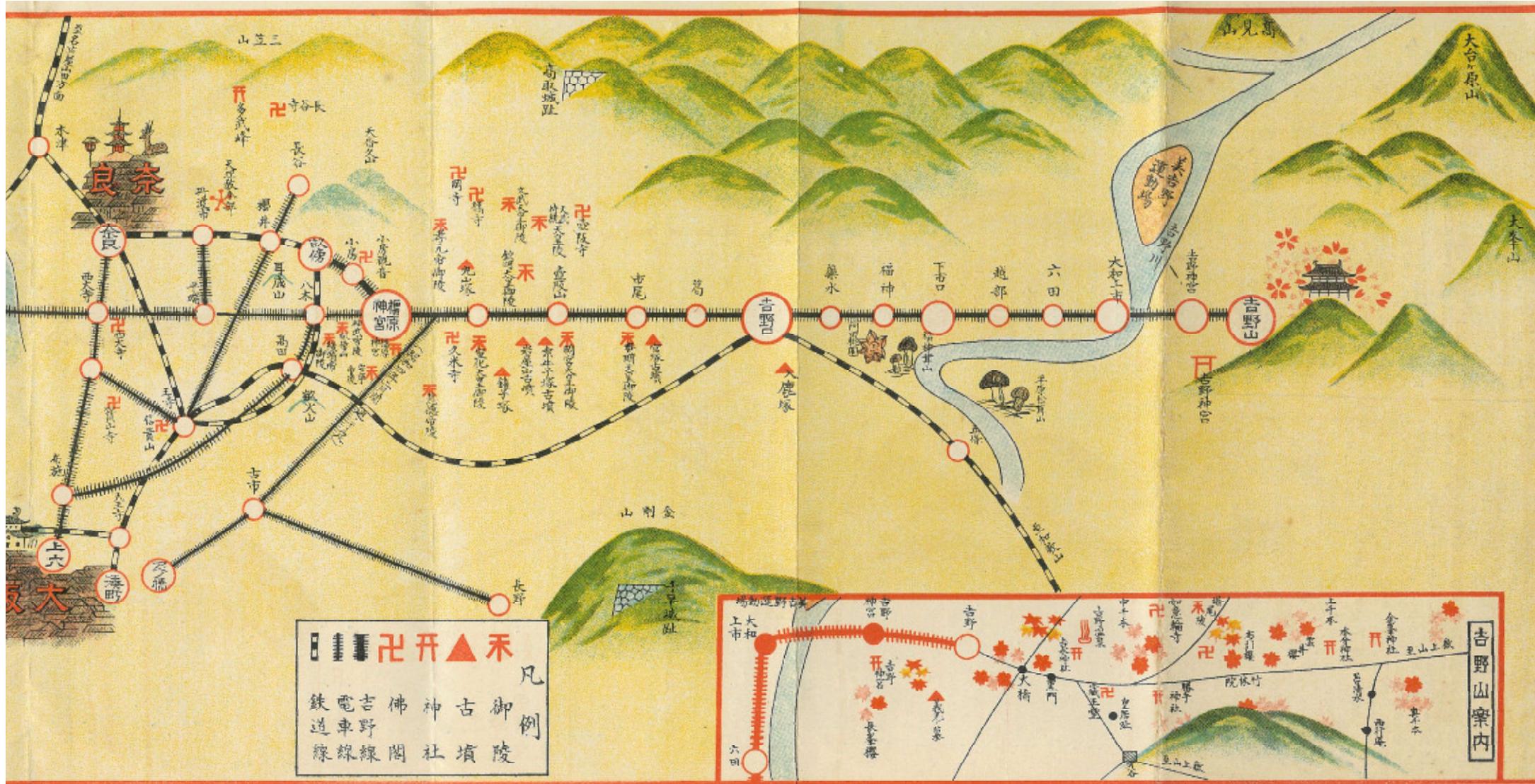
三重県立博物館『没後五十年 鹿子木孟郎展』1990年。

出前図書情報館演会inおおよど ミニパネル展「近代の吉野」(2019.11.27～12.27) 展示資料一覧

No.	展示	種類	名称	年代(和暦)	西暦	場所	備考
1・2	パネル	記念碑	春日杉と安西冬衛の詩碑	現代		吉野郡大淀町下淵	大淀町・西浦雪華氏揮毫
3・4	パネル	林業遺産	県営吉野貯木場のようす	昭和14年	1939	吉野郡吉野町丹治	川上村・成瀬匡章氏提供
5・6	パネル	民俗遺産	吉野川の筏師と筏流し	明治～大正初期		吉野川	川上村・成瀬匡章氏提供
7	パネル	流通遺産	吉野発電所落筏路	大正末年～昭和初期頃		吉野川	大岩・小西正久氏提供
8	パネル	交通遺産	柳(六田)の渡しのようす	明治～大正初期		吉野郡大淀町北六田・吉野町六田	川上村・成瀬匡章氏提供
9	パネル	交通遺産	六田の仮橋のようす	明治41年ごろ	1908	吉野郡大淀町北六田・吉野町六田	川上村・成瀬匡章氏提供
10	パネル	交通遺産	美吉野橋(木橋)	大正8年	1919	吉野郡大淀町北六田・吉野町六田	川上村・成瀬匡章氏提供
11	パネル	交通遺産	美吉野橋	現在		吉野郡大淀町北六田・吉野町六田	大淀町教育委員会撮影
12	パネル	記念碑	神武天皇像	現在		吉野郡上北山村大台ケ原	大淀町教育委員会撮影
13・14	パネル	交通遺産	池原橋	昭和4年	1929	吉野郡下北山村池原	大淀町教育委員会撮影
15・16	パネル	産業遺産	北村化学倉庫・外観	昭和25年	1950	吉野郡大淀町北六田	大淀町教育委員会撮影
17	パネル	流通遺産	大峯索道の基礎	大正8年か	1919	吉野郡大淀町今木・大岩	大淀町教育委員会調査・撮影
18～20	パネル	鉄道遺産	薬水門	大正元年	1912	吉野郡大淀町薬水	大淀町教育委員会撮影
21・22	パネル	学校遺産	大淀第二小学校校舎跡	昭和4年ごろ	1929	吉野郡大淀町下淵	大淀町教育委員会調査・撮影
23	パネル	鉄道遺産	下市口駅の旧プラットホーム跡	大正元年頃か	1912	吉野郡大淀町下淵	大淀町教育委員会撮影
24	パネル	鉄道遺産	旧吉野駅のプラットホーム跡	大正元年頃か	1912	吉野郡大淀町北六田	大淀町教育委員会撮影
25	パネル	鉄道遺産	旧吉野駅に停車中の列車	大正～昭和初期		吉野郡大淀町北六田	川上村・成瀬匡章氏提供

出前図書情報館演会inおおよど ミニパネル展「近代の吉野」(2019.11.27～12.27) 展示資料一覧

No.	展示	種類	名称	年代(和暦)	西暦	場所	備考
26	パネル	鉄道遺産	吉野鉄道敷設に係る免許状	明治32年	1889		奈良県立図書情報館提供(永田家文書)
27	パネル	鉄道遺産	吉野川南岸鉄道計画図	明治32年頃か	1889	吉野郡下市町新住～阿知賀間	奈良県立図書情報館提供(永田家文書)
28	ケース	鉄道遺産	吉野電車沿線案内(吉野鉄道)	昭和3年	1928	近鉄吉野線(延長前)	川上村・成瀬匡章氏提供
29	ケース	鉄道遺産	吉野電車沿線案内(吉野鉄道)	昭和3年	1928	近鉄吉野線(延長前)	川上村・成瀬匡章氏提供
30	ケース	交通遺産	吉野群山交通大図会(吉田初三郎)	昭和6年	1931		川上村・成瀬匡章氏提供
31	ケース	交通遺産	大峯山大台ケ原 吉野群山大図会(吉田初三郎)	昭和6年	1931		川上村・成瀬匡章氏提供
32	ケース	交通遺産	吉野山架空ケーブル系はがき(安全索道協会)	昭和4年	1929	吉野郡吉野町吉野山	川上村・成瀬匡章氏提供
33	ケース	交通遺産	吉野大観(中岡金峯編)	大正9年	1920		川上村・成瀬匡章氏提供
34	ケース	文学遺産	吉野葛・限定版(谷崎潤一郎)	昭和12年	1937		川上村・成瀬匡章氏提供
35	ケース	林業遺産	吉野林業案内(吉野材木同業組合総合会)	明治43年	1910		川上村・成瀬匡章氏提供
36	ケース	林業遺産	吉野林業案内(吉野郡役所)	大正10年	1921		川上村・成瀬匡章氏提供
37	ケース	林業遺産	挿画 吉野林業全書 完(土倉庄三郎ほか校訂・森庄一郎)	明治31年	1898		川上村・成瀬匡章氏提供
38	ケース	林業遺産	大日本山林大会 大和之印象(大和山林会撮影)	大正10年	1921		川上村・成瀬匡章氏提供
39	ケース	産業遺産	乾繭組合出荷番付 昭和11年度	昭和11年	1936	奈良県	大淀町・迎居茂實氏提供(迎居家文書)
40	ケース	産業遺産	昭和10年度晩秋蚕繭成績表	昭和10年	1935	奈良県	大淀町・迎居茂實氏提供(迎居家文書)
41	ケース	自然遺産	ニホンオオカミ頭骨(写真)	明治16年か	1883	吉野郡上北山村	大淀町教育委員会所蔵(岸田日出男関係資料)
42	ケース	流通遺産	大峯索道にともなう部品	大正～昭和初期		吉野郡大淀町今木・大岩	大淀町・小西正久氏提供



吉野電車沿線案内（吉野鉄道・昭和3年）より抜粋

MEMO

